

仏教とターミナルケア

——仏の救済をめぐる——

大正大学 准教授
曾 根 宣 雄

1、はじめに

仏教では、生老病死を人間が逃れることのできない苦しみとして捉え、これを四苦と称している。中でも「死」は、私達にとって最大の苦しみである。近年、末期患者に対するターミナルケアが重要視され、多くの医療関係者の尽力により疼痛緩和がかなりの水準になってきている中で、仏教の関わりも注目されてきている。このこと自体は、大いに歓迎すべきことであり、称讃されるものだといえるだろう。

一方、ターミナルケアへの仏教の関わりを考える上で注意すべきことは、何のために仏教が関わるのかということである。端的に言えば「望ましい死」を迎えるためや「死の受容」のために仏教が関わるのかということである。これはターミナルケアに関して仏教が関わって行く中での根本的な問題である。現在、仏教看護・ビハラー学会の会長を勤められている藤腹明子氏は、次のように述べている。

仏教では「丁度ローソクの火を吹き消すように、欲望の火を吹き消したものが到達する境地」（『和英対照仏教聖典』仏教伝道協会刊）のことを涅槃といいます。涅槃寂靜の境地とは、この世のさまざまな苦しみの中にあっても、もがきおぼれることなく、それらの苦を客観視、達観視できるようになることといえるでしょう。この境地が人間としての最終的な自己実現、あるべき姿であって、それがいわゆる人間的に成熟した姿ではないかと思います。

人が自分自身、あるいは他者の生老病死に対峙して「いのち」をめぐるさまざまな問題、苦しみを解決していくためには、まさにこのような人間的成熟が求められます。また逆に、自身の生老病死にきちんと向き合うことや、あるいは実際に医療現場での看取りへのかかわりを通じてこそ、人間的に成熟していくことができるのではないかと思います¹⁾。

これは、おそらくターミナルケアと仏教（宗教）の問題を考える際に提示されるであろう典型的な論理だといえよう。しかしこういったスタンスで臨むことについては、一度きちんとした検討が必要ではないだろうか。確かに「涅槃寂靜」の境地は、すばらしいものであり、究極的には私達が目指すべきものである。しかしながら、釈尊の登場以来どれだけの人がこの娑婆世界においてその境地に到達しえたのかということが問題になろう。「人間的成熟」も同様である。はたして、すべての人が成熟して人生を終われるのだろうか。こういった論理の元、一体どれだけの人が涅槃の境地に入り、人間的成熟を実現して最期を迎えられたのだろうか。

「望ましい死」や「死の受容」ということを論じるこういった考え方を、筆者は「あるべき姿」論と呼んでいる。「望ましい死」と「望ましくない死」、「死を受容した最期」と「死を受容できない最期」、こういった対比で語られる際に、人は当然「望ましい死」「死を受容した最期」でありたいと願うことであろう。「望ましくない死」「死を受容できない最期」を願う人は、まずいないであろう。しかしながら、実際は一体どうなのだろうか。

そもそも筆者には、「死の受容」とか「望ましい死」という言葉の背景には、人間が最後の死のありさまを自己管理できるという驕りがあるように感じられて仕方がない。平成23年の東北大震災において、私達は「死に様」を問うことすらできないのが人間の現実であり、娑婆の現実であることを思い知らされたのではないだろうか。何も筆者は、震災の問題とターミナルケアの問題を安易に関連づけようとしたのではない。しかしながら、どのような状況であっても「死苦」の苦しみは同じであり、苦しみの中にある人々に対し、死を客観視せよとか達観せよ

というのは、所詮は第三者によるきれいな事に過ぎないのではないかという疑念を拭い去ることができない。その意味で私達は人間の無力さに改めて思いをはせ、現実の姿を直視して行かねばならないのではないだろうか。

「望ましくない死」を迎えざるを得ない現実、「死を受容できない最期」を迎えなくてはならない現実、これが私達の現実の姿である。たとえば、幼い子供やこれからという若者が死に直面せざるを得ない状況において、「望ましい死」とか「死の受容」などという概念自体を持ち出すことができるだろうか。また、それが意味を持つことなのだろうか。当事者が生きたいと願い生に執着し、家族が最期の最期まで現実を受け入れられず悲しみに苛まれることはいけないことなのだろうか。

2、父性的宗教と母性的宗教

宗教学者の松本滋氏は、宗教を父性的宗教と母性的宗教に分類し、

父性的宗教——禁欲的・自律的・条件的・規範的

母性的宗教——和合的・寛容的・無条件的・包容的²⁾

としている。さらには、

人間の宗教においても、母性的なものと父性的なもののどちらが進んでいるとか、どちらがより優れているというようなことは言えません。それぞれが異質的な原理の上に立って、相葛藤し、また相補い合っていると理解すべきです。

人間個人が十全なものとして発展するためには、この両方が共に必要であるように、人間の文化、宗教が十全なものとして人間生活を豊かにしてゆくためにも、この父性的宗教と母性的宗教との両方の原理が、バランスをとることが必要だと考えられるのです³⁾。

と述べ、宗教は父性（禁欲的・自律的・条件的・規範的）と母性（和合的・寛容的・無条件的・包容的）のバランスが大事であることを指摘している。この指摘に基づくならば、現在ターミナルケアの場に提示されている仏教の教えが極めて父性的であるということができよう。松本博士は母性的宗教について「人間の自律分離によって惹き起こされる孤立感疎外感に耐えきれなくなった際には、すべてを許しすべてを受け容れてくれる包容的な母親的存在が重要な意味を持つ」⁴⁾ ことを指摘されている。そういった意味において、仏教の有する母性的宗教の側面を提示していくことは、有意義であると考えられるのである。

唐の善導は「発願文」において「命終の時において、心が顛倒せず、心が錯乱せず、心が失念しませんように。身心にもろもろの苦痛がなく身心快樂にして、禪定に入るようでありますように。聖衆達どうか現前してください。そして仏の本願に乗じて、阿弥陀仏国に上品往生させてください」と述べて、臨終が安らかであることを願い、臨終時の「正念」を求めている。臨終時において「正念」の境地に入れるか否かは、重要な問題であるが、一方で人間に煩惱があることも事実である。本論ではこの問題について、源信僧都（天台宗）・覚鑊上人（真言宗）・法然上人（浄土宗）の説示の中より、臨終を迎える仏による救済（加持を含む）に注目して考察してみたい。（※以下、祖師の敬称を略す）

3、祖師の説示

【源信（942-1017）】

『往生要集』巻中には、臨終行儀について次のように説かれている。

第二臨終行儀者先明行事次明勸念初行事者四分律鈔瞻病送終篇引中國本傳云祇洹西北角日光沒處爲無常院若有病者安置在中以凡生貪染見本房内衣鉢衆具多生戀著無心厭背故制令至別處堂號無常來者極多還反一二即事而求專心念法其堂中置一立像金薄塗之面向西方其像右手舉左手手中繫一五綵幡脚垂曳地當安病者在像之後左手執幡脚作從佛往佛淨刹之意瞻病者燒香散華莊嚴病者乃至若有屎尿吐唾隨有除之或說佛像向東病者在前私云若無別處但令病者面向西燒香散華種種勸進或可令見端嚴佛像導和尚云行者等若病不病欲命終時一依上念佛三昧法正當心身迴面向西心亦專注觀想阿彌陀佛心口相應聲聲莫絕決定作往生想華臺聖衆來迎接想病人若見前境則向看病人說既聞說已即依說錄記又病人若不能語看病必須數數問病人見何境界若說罪相傍人即爲念佛同懺悔必令罪滅若得罪滅華臺聖衆應念現前準前鈔記又行者等眷屬六親若來看病勿令有食酒肉五辛人若有必不得向病人邊即失正念鬼神交亂病人狂死墮三惡道願行者等好自謹慎奉持佛教同作見佛因緣一中略一明知於所求事取彼相時能助其事而得成就非唯臨終尋常準之綽和尚云十念相續似若不難然諸凡夫心如野馬識劇猿猴馳騁六塵何曾停息各須宜致信心豫自剋念使積習成性善根堅固也⁵⁾

内容を整理するならば、以下の通りである。

- ① 祇園精舎の西北の角、日没する方角に無常院を造り、病人を安置する。
- ② 衣鉢や生活資具を見て執着心を起こすことを防ぐために、別の場所に安置する。
- ③ 御堂の中に立像を置き、金箔を像に塗り、像の面を西方に向ける。その仏像の左手に地面に垂れる長い五色の細長い幡を繋ぎ、病人を仏像の後方に安置し左手に幡を持たせ浄土往生の思いをさせる。
- ④ 看病する者は焼香、散華して病人を莊嚴し、屎尿吐唾があれば取り除く。
- ⑤ 命終の時は、専ら念仏三昧の法に依り、顔を西に向け、心も一心に阿弥陀仏を觀想し、心と口を共にして、念仏の声を絶やすことのないようにする。決定して往生する想いをなし、浄土より聖衆が来て迎接する想いをなす。病人はもし聖衆等を見たなら看病人に語り、看病人はそれを記録する。
- ⑥ 病人が話すことができなければ、看病人は看病しながら何の境界を見たか問う。もし病人が罪相を見たことを語ったならば、念仏して助け、同じく懺悔して罪を滅せさせる。もし罪が滅して、聖衆が念に応じて現前したならば、看病人はそれを記録する。
- ⑦ 行者の身近な親族や妻子等が看病する際には、酒肉五辛を禁じる。酒肉五辛を食した人が病人に近づけば正念を失い鬼神交亂し、病人は狂死し、三惡道（地獄・餓鬼・畜生）に墮ちるからである。
- ⑧ 最後の十念相續は困難ではないようであるが、凡夫の心は野馬のようであり、識は猿よりもはげしく六塵は乱れ未だやんだことがない。それ故あらかじめ、念仏につとめ、善根を堅固にしておくべきである。

このように、亡くなり行く者の往生のために細かく規定がなされている。源信が同書で「或いは説かく、仏像を東に向け、病者を前に在く」と述べているように、阿弥陀仏の安置は「引接」を表す西向きと「来迎」を表す東向きがあったようである。

まず注目されるのは、臨終行儀が同信同行の者による看取りであるということである。平生より共に浄土往生を願った仲間が最後まで寄り添うというのは、亡くなり行く者にとって大きな支えとなったと考えられる。またこれは、孤独な死を迎えさせないという意味においても、大きな意味を持っているといえよう。人間にとって、死自体は大きな孤独であるが、それに対して臨終の場では、同心同行の者が寄り添い、命終にあたっては阿弥陀仏・觀音勢至及び聖衆が来迎引接されるというのは、亡くなり行く者が孤独な死を迎えないことを示すものである。

また、亡くなり行く者を常に清潔に保つことが示されている。これには、亡くなり行く者の苦しみを軽減させ、少しでも快適にするという姿勢を見ることが出来る。さらには、酒肉五辛を食した者が看病することを禁じている。なぜならば、これらはすべて心の安定を妨げるものと考えられるからである。

そして源信は「臨終の一念は百年の業に勝る」⁶⁾という認識のもと平生の念仏よりも臨終の念仏を重視している。したがって、平生の念仏や善根は、臨終時にきちんと念仏を称えられるようにするための準備と位置づけられるのである。

さらに源信は『往生要集』中において、

八彼白毫相若干光明常照十方世界念佛衆生攝取不捨當知大悲光明決定來照如華嚴偈云又放光明名見佛彼光覺悟命終者念佛三昧必見佛命終之後生佛前故今應作是念願彌陀佛放清淨光遙照我心覺悟我心轉境界自體當生三種愛令得念佛三昧成就往生極樂南無阿彌陀佛⁷⁾

と述べている。阿弥陀仏が臨終時に光明を放って現れることを見仏というとし、阿弥陀仏の光明は、命終の者を覚悟させるものであって念仏三昧によって必ず仏を見たてまつり、命終の後に往生することができるとする。その上で阿弥陀仏に対して、清浄の光を放って彼方より私の心を照らし自分の心を覚悟せしめ、境界愛(家族等への執着心)と自体愛(自らの身命に対する執着心)と当生愛(死後どうなるのかという不安)(死後どうなるのかという不安)の三種の愛心を転じさせ、念仏三昧を成就して極楽浄土に往生することを得させてくださいと願っている。

ここで注目されるのは、人間が死に直面する時に境界愛、自体愛・当生愛という「三種の愛心」が起こることを指摘した上で、阿弥陀仏の光明に照らされることによってそれが転じられることを説いている点である。

このように源信は、臨終のあり様を最も重視し、臨終行儀について詳細な説明を行い、臨終の念仏の大切さを強調している。それ故に、平生より臨終の十念のための準備が求められるのである。

【覚鑊 (1095-1143)】

新義真言宗の中興の祖である覚鑊は、『一期大要秘密集』のはじめにおいて次のように述べている。

夫以一期大要在最後用心。九品往生、任臨終正念。求成佛者、當習此心。出離生死、只此刹那在。集密藏要義為九種用心、拂極惡之罪業望九品之蓮臺。若依最後臨終規儀、破戒僧尼必得往生。造惡男女、定生極樂。何況有智有戒。何況善男善女。是即真言秘觀之所致。深信勿狐疑矣⁸⁾。

まず臨終の用心の大切さと、往生のためには臨終正念が重要であることを明らかにし、臨終の規儀に依ったならば、破戒の僧尼であっても往生を得ることはもちろん、造惡の男女も必ずや極樂に生まれるとする。そして、破戒や造惡の者が往生できるのであるから、ましてや有智有戒・善男善女であるならばなおさらであるとしている。

そして「七に極樂を觀念する用心門」においては、密教の立場について次のように説明している。

獅子三藏意云、顯教云、極樂者、從是西方過十萬億有佛土也。佛是彌陀、寶藏比丘証果也。密教云、十方極樂皆是一佛之土。一切如來皆是一佛身。無殊娑婆、更觀極樂。又何必隔十萬億土。不離大日、別有彌陀。又何寶藏唱覺彌陀哉。密嚴淨土大日宮位、極樂世界彌陀心地。彌陀大日智用、大日彌陀理體。密嚴者極樂之總體、極樂者密嚴者別德。最上妙藥、密嚴集之。極樂之稱、彌陀之號、起是。然彼極樂何處、遍於十方。觀念禪房、豈有異處哉。如此觀時、不起娑婆忽生極樂。我身入彌陀。不替彌陀、即成大日、吾身出大日、是則即身成仏妙觀矣。

顯教における極樂とは西方十万億土を隔てた浄土であり、寶藏⁹⁾比丘の成仏による阿弥陀仏を説くが、密教においては、十方の浄土はいずれも一仏の土(密嚴浄土)であり、一切の如来は一仏の身(大日如来)であるとする。すなわち大日如来を離れて別に阿弥陀仏が存在するのではないことを指摘し、「阿弥陀仏=大日如来の智用、大日如来=阿弥陀仏の理体」「密嚴浄土=極樂の総体、極樂=密嚴の別德」であるとしている。そしてこれらのことを観じる時、娑婆にいるままで忽ち極樂に生まれ、我が身が阿弥陀仏の中に入り、そのまま大日如来となり、我が身は大日如来から出るとし、これが即身成仏であるとしている。

四 すなわち、すべての仏は大日如来の顯現であるのであるから、阿弥陀仏は大日如来を離れて存在するのではなく、極樂浄土もまた密嚴浄土の別德ということになる。これは、覚鑊の基本的な立場を示すものだといえるだろう。

「八に決定往生の用心門」においては、臨終について次のように述べている。

是則最後臨終用心。召知識五人猶能可約事。若有別願、好瑞座者、可任意樂。唯如来既頭北面西、入於涅槃。釋軌軌儀良可仰之。我臥頭北面西。(中略)懸眼於本尊合掌取五色。若結本尊印、眞言念佛三密不懈、是則決定往生相狀若住此威儀、一切勿呵責。中間示社哥、心有散亂歟。知識人人不鳴靜居。知識用心之外、不可入同

- ⑮ 『経』に「五逆の罪人は、善知識に遇わなければ往生することはできない」と説かれているが、もし正念に住したならば、善知識は必要ない。善知識は臨終者の誤りを正し苦しみから助けるためのものである。

このように覚饒は『一期大要秘密集』において、密教において阿弥陀仏は大日如来の働きであり、大日如来は阿弥陀仏の理体であることを指摘した上で、「八に決定往生の用心門」において詳しく臨終の用心を説いている。ここで注目されるのは、亡くなり行く者は念仏もしくは真言を称え、善知識は不動尊の慈救の呪を称えるという点である。このことは、臨終正念のためには仏の救済や加持力が必要であることを示している。また、南無阿弥陀仏と称えることにより阿弥陀仏が身中に入り、六根が清浄になって往生するという教えは、密教の立場を示すものといえるだろう。

【法然（1133-1212）】

浄土宗を開いた法然は、臨終の問題についても従来の祖師とは異なった見解を示している。以下、それを整理しながら見ていこう。『三部経釈』においては、臨終の三種の愛心について次のように述べている。

「臨終の時、仏みずから来迎したまうに、諸の邪業繫よく礙うるものなし」。これは衆生命終る時に臨みて、百苦来たり逼めて身心安き事なく、悪縁外に牽き妄念内に催して、境界、自体、当生の三種の愛心競い起る。第六天の魔王この時に当りて威勢を起してもて妨をなす。かくのごときの種種の障を除かんがために、必ず臨終の時にはみずから菩薩聖衆に圍繞せられてその人の前に現ぜんと誓いたまえり。第十九の願これなり。これによって臨終の時至れば仏来迎したまう。行者これを見たてまつりて、心に歓喜をなして禅定に入るがごとくして、たちまちに観音の蓮台に乗じて安養の宝池に到るなり。これらの益あるが故に「念仏衆生摂取不捨」というなり¹⁰⁾。

法然は、衆生が臨終において、境界愛（愛する者に対する執着心）、自体愛（自らの身体に対する執着心）、当生愛（死後どうなるかという不安）の三種の愛心が起ることを指摘している。しかしながら阿弥陀仏の来迎によって、三種の愛心は滅せられ、亡くなり行く者は心に歓喜を起し禅定に入るようにして、観音の蓮台に乗じて極楽浄土に至るとしている。『逆修説法』においても「いわゆる病苦身にせまりまさに死せんと欲する時、必ず境界自体當生の三種の愛心起きるなり。しかるに阿彌陀如来大光明を放ちて行者の前に現れたまう時、未曾有のことなる故に帰敬の心の外には他念無し。しかれば三種愛心を亡ぼして更に起きることなし。」¹¹⁾とあり、阿弥陀仏の来迎によって三種の愛心が滅せられることが明らかにされている。

『浄土宗略抄』においては、従来の教えとは異なる来迎観を示している。

またまめやかに往生のころざしありて弥陀の本願を憑みて念仏申さん人、臨終の悪き事は何事にかあるべき。その故は仏の来迎したまう故は行者の臨終正念のためなり。それを心得ぬ人はみな我が臨終正念にて念仏申したらん折ぞ仏は迎えたまうべきとのみ心得たるは、仏の本願を信ぜず、経の文を心得ぬなり。『称讃浄土経』には「慈悲をもて加え祐けて心をして乱らしめたまわず」と説かれたるなり。ただの時よくよく申し置きたる念仏によりて必ず仏は来迎したまうなり。仏の来たりて現じたまえるを見て正念には住すと申すべきなり。それに前の念仏をば空しく思いなして由なき臨終正念をのみ祈る人の多くある、ゆゆしき僻胤の事なり。されば仏の本願を信ぜん人は予て臨終を疑う心あるべからず。当時申さん念仏をぞいよいよ心を至して申すべき。いつかは仏の本願にも臨終の時念仏申したらん人をのみ迎えんとは立てたまいたる。臨終の念仏にて往生すと申す事は、もとは往生をも願わずして偏に罪を造りたる悪人の、すでに死なんとする時初めて善知識の勧めに遇いて念仏して往生すとこそ『観経』にも説かれたれ。もとより念仏を信ぜん人は臨終の沙汰をば強ちにすべき様もなき事なり。仏の来迎一定ならば臨終の正念はまた一定とこそは思うべき理なれ。この意をよくよく意を留めて心得べき事なり¹²⁾。

仏が来迎するのは、臨終の行者を正念に至らしめるためであるとし、臨終正念故に仏の来迎があると心得ているのは、仏の本願も經典も心得ていない者であるとする。平生によく修した念仏によって必ず仏は来迎し、それによ

て衆生は正念に入るのであるとしている。そして、臨終の念仏によって往生するということは、往生を願わず罪を造った悪人がまさに死を迎える時に初めて善知識の勧めによって念仏をして往生するということであり、『観経』に説かれているとした上で、念仏を信じている者は臨終の行い（臨終行儀）をしいてする必要もなく、仏の来迎が定まっているならば、臨終の正念も定まっていると思うべきであると述べている。

ここで注目されるのは、法然が従來說かれていた「正念来迎（亡くなり行く者が正念に住したならば来迎がある）」という教えと異なる「来迎正念（阿弥陀仏の来迎によって亡くなり行く者が正念に導かれる）」という教えを説いている点である。『逆修説法』の一七日においても『阿弥陀経』の説示に基づきながら「臨終正念なるが故に来迎したまうにはあらず、来迎したまうが故に臨終正念なりと云う義明かなり」¹³⁾と述べていることから、法然が「正念来迎」から「来迎正念」へと教えを転換させていることが判る。前述した来迎によって三種の愛心が減するという教えや、阿弥陀仏の来迎によって亡くなり行く者が正念に導かれるという教えは、いずれも自らの力によって執着心を滅し得ない凡夫のために、阿弥陀仏が救済作用としてなされることである。これらは「正念来迎」から「来迎正念」への教えの転換を明確に示すものである。

また善知識については、『往生浄土用心』において、

日ごろ念仏申せども臨終に善知識に遇わずば往生し難し、また病大事にて心乱れば往生し難しと申しそうらうらんは、さもいわれてそうらえども、善導の御心にては、極楽へ参らんところざして多くも少くも念仏申さん人の命尽きん時は、阿弥陀仏聖衆とともに来たりて迎えたまうべしとそうらえば、日ごろだにも御念仏そうらわば、御臨終に善知識そうらわずとも仏は迎えさせたまうべきにてそうろう。また善知識の力にて往生すと申しそうろう事は『観経』の下三品の事にてそうろう。下品下生の人なんどこそ日ごろ念仏も申しそうらわず往生の心もそうらわぬ逆罪の人の、臨終に初めて善知識に遇いて十念具足して往生するにてこそそうらえ。日ごろより他力の願力を憑み思惟の名号を称えて極楽へ参らんと思ひそうらわん人は、善知識の力そうらわずとも仏は来迎したまうべきにてそうろう¹⁴⁾。

と述べている。この中で、日頃念仏を称えていても臨終に善知識に遇わなければ往生は難しいということや、病が重く心が乱れていれば往生が難しいということがいわれているけれども、善導の御心によれば極楽往生を願い、多くても少なくとも念仏を称えた人に対しては、命終の時に阿弥陀仏が聖衆と共に来迎してくださるとし、日頃念仏を称えていれば、臨終に善知識がいなくても来迎があることを示している。そして、善知識の力で往生するということは、『観経』の下品のことであり、下品下生の者は、日頃念仏を称えることもなく、往生も願わない悪逆の罪人であり、その者が臨終に初めて善知識に遇い、十念を具足して往生するとしている。さらには、日頃より阿弥陀仏の本願力をたのみ、念仏を称え極楽に往生しようと願っている人は、善知識の力がなくとも、仏は来迎してくださるとしている。ちなみに『正如房へつかはす御文』には「御心一つを強く思召して、ただなかなか一向に凡夫の善知識を思召し捨てて仏を善知識に憑みまいらせさせたまうべくそうろう。もとより仏の来迎は臨終正念のためにそうろうなり」¹⁵⁾とあり、凡夫を善知識と頼むのではなく阿弥陀仏を善知識とすべきことが述べられている。

さらに『往生浄土用心』においては思うようにならない人の死と阿弥陀仏の救いについて次のように述べている。

先徳たちの教にも、臨終の時に阿弥陀仏を西の壁に安置しまいらせて、病者その前に西向きに伏して、善知識に念仏を勧められよとこそそうらえ。それこそあらまほしき事にてそうらえ。ただし人の死の縁は予ねて思うにも叶いそうらわず。にわかには大路、徑にて終る事もそうろう。また大小便痢のところにて死ぬる人もそうろう。前業逃れ難くて、太刀小刀にて命を失い、火に焼け水に溺れて命を滅ぼす類多くそうらえば、さようにて死にそうろうとも、日ごろの念仏申して極楽へ参る心だにもそうろう人ならば、息の絶えん時に、阿弥陀、観音、勢至来たり迎えたまうべしと信じ思召すべきにてそうろうなり¹⁶⁾。

先徳達の教えには、臨終の時に阿弥陀仏を西に安置し病人を西向きにさせ善知識に念仏を勧めさせなさいという。これはそうありがたいことではあるとした上で、人の死の縁は、思うようにはならないものであることを強調する。急に道で命が終わることもあれば、大小便をしている所で死ぬ人もある。太刀や刀で命を失い、火に焼け水に溺れ

て命を失う人もたくさんいるのである。そのような状況で死を迎えたとしても、日頃から念仏を申して極楽往生を願っている人であれば、命終の時に阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩は、来迎して下さると受け止めるべきであるとしている。この『往生浄土用心』の説示は、元暦二年（1185）に起きた文治地震に基づくものと推測されるが、法然が娑婆の現実を踏まえ教を示している点は注目すべきであろう¹⁷⁾。また、人の死の縁が思うようにならないものであるということから、臨終行儀を重視せずに平生の念仏を重視していることは、法然の大きな特徴である。

このように法然は、凡夫の現実を直視し、經典に基づきながら「正念来迎（正念→来迎→浄土往生）教えから「来迎正念（来迎→正念→浄土往生）」の教を示した。このことは、自らの力によって正念に住することのできない凡夫に対して、阿弥陀仏の救済がそういった凡夫のあり方自体を前提にしていることを明らかにするものであったといえよう。

4、おわりに

源信・覚鑿・法然は、それぞれ天台宗・真言宗・浄土宗の祖師であってその教学的立場は同じではない。端的に言えば、源信と覚鑿は臨終行儀を重視するのに対し、法然は臨終のあり方よりも平生の念仏を重視している。特に法然の場合は、臨終行儀を往生の条件としていないと共に自らの力によって正念を得ることが出来ない衆生のために阿弥陀仏の来迎があるとしていることが大きな特徴である。

しかしながら、源信が阿弥陀仏の光明によって三種の愛心が滅せられ念仏三昧を成就することを願っている点、覚鑿が念仏もしくは真言を称え仏の救済や加持を求めている点、法然が衆生が正念に導かれるための来迎を説いている点は、いずれも亡くなり行く衆生のためには、仏の済度が不可欠であることを示すものであり、仏の導きや救済を願っている点は共通している。このことは、いかなる法門であっても亡くなり行く衆生にとっては、仏からの働きかけや救済が大切であることを示すものであろう。

また、法然の「人の死の縁は予ねて思うにも叶いそうらわず」という現実に対する指摘に対しては、宗派を超えてきちんと受けとめて行く必要があるだろう。誰もが、臨終行儀を修せるわけではなく、望ましい最後を迎えられる訳ではない。その意味において、思うようにならない死に対する仏の導きや救済を示して行くことは最も肝要だといえるだろう。

現代においても衆生の臨終時に執着心が生じることは同様であり、一方で臨終が安らかであることを願うことも同様である。その際に提示すべきことは、自らを律せよという教えではなく、悩み苦しみの中にあっても導いてくださる仏、頼るべき仏が存在するという教えではないだろうか。これこそが仏教の有する母性的宗教の側面の提示というべきであり、自らを律して亡くなって行けない者にとっては、非常に有益であるといえるだろう。仏による救済作用を説くことは、衆生が煩悩の問題を処理する上で重要である。その意味において、ターミナルケアの場において、こういった内容を提示することには大きな意義があると考えられるのである。

註

- 1) 『宗教と終末医療』（アーユスの森新書）118～119 頁
- 2) 松本滋『父性的宗教母性的宗教』東京大学出版会
- 3) 『同右』25 頁
- 4) 『同右』
- 5) 『浄土宗全書』（以下、浄全とする）15・112 頁b～113 頁a
- 6) 『浄全』15・116 頁
- 7) 『浄全』15・115 頁
- 8) 『興教大師全集』201 頁
- 9) 『無量寿経』では、宝蔵比丘ではなく、法蔵比丘となっている。
- 10) 『浄土宗聖典』（以下、聖典とする）4・288～289 頁

- 11) 『昭和新修法然上人全集』(以下、昭法全とする) 234 頁
- 12) 『聖典』4・358 頁
- 13) 『昭法全』234 頁
- 14) 『聖典』4・554 頁
- 15) 『聖典』4・429 頁
- 16) 『聖典』4・556 頁
- 17) 鴨長明の『方丈記』二一には、

また、同じころであつたろうか。ものすごい大地震があつて、ひどくゆれた。その揺れ方と云つたら、なみなみのものではない。山はくずれて、川をうずめてしまい、海は傾斜して、海水が陸地をひたした。土が裂けて、水がわき出し、巖石が割れて、谷にころげ込む。海辺を漕ぐ船は波に翻弄され、道を行く馬は立つ足もとが定まらない。京都近辺では、あちらでもこちらでも、お寺の堂や塔が被害を受け、満足に残ったものは一つもない。あるものはくずれおち、あるものはひっくりかえった。塵灰が立ちのぼって、さかんに吹き上げる煙のようである。大地がうごき、家屋が破壊される音は、雷鳴とまったく同じだ。家の中にいると、すぐにでもおしつぶされそうになる。外に走り出れば、地面が亀裂する。

(『方丈記』築瀬一雄訳注 角川ソフィア文庫 99～100 頁)

と記されているように、京都の被害は甚大であつた。この時、法然は 53 歳であり、43 歳で浄土宗を開宗した後、比叡山を下り吉水の地に住していた。『往生浄土用心』の内容は、經典に基づくものであることはもちろんのこと、自らが地震を体験した上での言葉である可能性が高いと考えられるのである。